シリーズ：一目瞭然！目で診る症例

「一目瞭然！目で診る症例」 問題編

安田 美帆 大塚 文男

〔日内会誌 108：811～813, 2019〕

77歳の男性。1カ月前から右眼の腫脹を自覚していた。1週間前から右眼の腫脹と複視が急速に進行し、疼痛や発赤も伴うようになったため、受診した。来院時の眼の写真を図1に示す。

図1 右眼写真

問題

- 1) 最も考えられる病態は何か。
- 2) 鑑別疾患は何か。
- 3) 鑑別のために必要な検査は何か。

岡山大学病院総合内科

Series : Diagnosis at a Glance.

Miho Yasuda and Fumio Otsuka : Department of General Medicine, Okayama University Hospital, Japan.

シリーズ：一目瞭然！目で診る症例

「一目瞭然！目で診る症例」 解答編

Key words 眼窩腫瘍，悪性リンパ腫

解答

- 1) 眼窩腫瘍
- 2) ①悪性リンパ腫を含むリンパ増殖性疾患
 - ②髄膜腫・涙腺部腫瘍・転移性を含む腫瘍性疾患
 - ③感染症・甲状腺眼症・IgG4関連疾患・サルコイドーシス・血管炎等を含む炎症性疾患
- 3) 画像検査(頭部造影MRI, Gaシンチグラフィ, FDG-PET/CT), 血清学的検査(MPO-ANCA・PR3-ANCA・IgG4・ACE・リゾチーム等の免疫学的検査, FT₃・FT₄・TSH・TSH受容体抗体〈TRAb・TSAb〉等の甲状腺関連検査, 可溶性IL-2レセプター(sIL-2R)等の腫瘍マーカー), 組織生検

解説

本症例では眼球突出・眼瞼浮腫・結膜充血がみられ，眼窩腫瘍が最も疑われる．眼窩腫瘍は，その約70%が良性・約30%が悪性，約60%が原発性・約30%が続発性・約10%が転移性とされ，眼窩原発の悪性腫瘍では悪性リンパ腫が最も多く^{1,2)}，転移性眼窩腫瘍では肺癌・乳癌，次いで，肝細胞癌，副腎癌や胃癌が原発巣となる³⁾．

本症例の鑑別としては，リンパ増殖性疾患(悪性リンパ腫等)，腫瘍性疾患(海綿状血管腫・髄膜腫・涙腺部腫瘍・転移性/続発性眼窩腫瘍等)，炎症性疾患(感染・甲状腺眼症⁴⁾・IgG4関連疾患・サルコイドーシス・ANCA(anti-neutrophil

cytoplasmic antibody)関連血管炎・Castleman病等)が挙げられる⁵⁾．

眼窩腫瘍は比較的稀な疾患であるが，前述のとおり，鑑別は多岐に亘り，治療方針や予後も大きく異なることから，診断のためには，血清学的検査や頭部造影MRI(magnetic resonance imaging)，FDG-PET/CT(fluorodeoxyglucose positron emission tomography/computed tomography)等の画像検査に加え，組織生検が重要である．眼窩内は生検のアプローチが困難な部位であり，病変は全身性疾患の局所所見として認められる場合が多いことから，生検部位は全身の精査を行ってから決定することが望ましい．

本症例では，血清中のsIL-2R 902 U/mlとCRP 1.67 mg/dlが軽度上昇していたが，甲状腺機能及び甲状腺自己抗体・IgG4・サルコイドーシスの関連マーカーや，その他の自己抗体に異常は認めなかった．頭部造影MRIでは，右眼窩内に眼球を前方に圧排する拡散強調像で高信号，比較的均一なガドリニウム造影効果のある20 mm大の腫瘍を認め(図2A)，PETでは右眼窩(図2B 矢印)と鼻中隔(図2B 矢頭)にFDG核種の高集積があり，悪性リンパ腫が最も疑われた．アプローチの容易な鼻中隔腫瘍から生検を行い，びまん性大細胞型B細胞リンパ腫(diffuse large B-cell lymphoma: DLBCL)と診断した．R-CHOP療法(rituximab, cyclophosphamide, doxorubicin, vincristine and prednisolone)を施行したところ，腫瘍は速やかに縮小し，6コー

図2

A：頭部造影MRI

B：FDG-PET/CT

C：治療前後の右眼写真

ス終了後は視野・視力障害なく、寛解を維持している⁶⁾(図2C)。

眼窩腫瘍のうち、悪性リンパ腫は化学療法が著効する場合が多いが⁷⁾、診断・治療が遅れると永続的な視野障害や視力低下、眼球運動障害

を残すため、適切な診断と早期の治療介入が重要である。

著者のCOI (conflicts of interest) 開示：本論文発表内容に関連して特に申告なし

文献

- 1) Shider R, et al : Survey of orbital tumors at a comprehensive cancer center in the United States. Head Neck 33 : 610-614, 2011.
- 2) Bonavolontà G, et al : An analysis of 2,480 space-occupying lesions of the orbit from 1976 to 2011. Ophthalmic Plast Reconstr Surg 29 : 79-86, 2013.
- 3) Amemiya T, et al : Metastatic orbital tumors in Japan : a review of the literature. Ophthalmic Epidemiol. 9 : 35-47, 2002.
- 4) Katsuyama T, et al : Rapid progression of Graves' ophthalmopathy despite the administration of thiamazole. Intern Med. 52 : 2317-2320, 2013.
- 5) 長谷川光広：眼窩内腫瘍の識別と治療. 脳外誌 26 : 419-429, 2017.
- 6) Yasuda M, et al : Unilateral Exophthalmos due to Lymphomatous Involvement. Intern Med 57 : 1335, 2018.
- 7) Eckardt AM, et al : Orbital lymphoma : diagnostic approach and treatment outcome. World J Surg Oncol 11 : 73, 2013.